

1970～80年代における炭鉱閉山と青年たちの進路危機

——中学3年生の作文分析

笠原良太

How Did Miner's Children Experience Mine Closures and Crises in Transition? :
Analyzing Ninth Grader's Essays in 1970s and 1980s

Ryota KASAHARA

Abstract

Mine closures significantly affected miners and their families, especially children. There was major impact on ninth graders in junior high school, who were faced with career decisions. This paper aims to explore how they experienced mine closures and crises in transition in the 1970s and 1980s. The paper is based on analysis of the archived essays written by ninth graders at the time of each closure. There are three findings. First, the effect of closures on their career aspirations depended on the month of the closure. They faced severe crises if closures happened after their second term when they were forming their career aspirations. The crisis was even more severe if closure happened immediately before graduation. It was difficult for them to make up their mind about their life course after graduating from junior high school. Second, the conditions of the industry, economy, and situation of the period had a major effect on the crises. In the 1970s, the crises were relatively less severe as displaced miners were able to find suitable employment outside or within the coal industry, whereas closures in the 1980s reinforced the crises as miners had limited opportunities for re-employment. Therefore, the crisis was most severe for those ninth graders who faced closure after their second term in the late 1980s as they feared advancing to high school. Third, they made efforts to overcome such serious crises by altering their career decision and by supporting their families in adapting to new circumstances. Although they had faced emotional turmoil about unexpected changes in career decision, they referred to the difficult conditions faced by their families (e.g. their father's re-employment and family finances) and attempted to contribute.

1. 問題の所在

「閉山」「閉山」「閉山」おそろしい言葉だ。なぜ。それはこの地域全体を不安のどん底に落とし入れてしまう。不安・「不安」これからどうしていいのかわからない。(1970年、尺別炭砦中学校3年男子)

高度成長期、活況を呈していた日本経済とは対照的に、国内の石炭産業は漸次的に撤退し、各産炭地の大型炭鉱が相次いで閉山した。山間の炭鉱地域に居住していた炭鉱労働者とその家族は、突如として生活基盤を失い、地域移動と社会移動を余儀なくされた。閉山の直接的影響を受けたのは炭鉱労働者であったが、彼らの子どもたちもまた間接的だが多大な影響を受けた。多感な彼らは、父親の失業、転校、友人との離別、故郷の崩壊と喪失、家族関係・生活環境の変化などを短期間のうちに経験し、大きな不安を抱えた。上記の作文は、閉山という歴史的出来事を経験した中学3年生の作文である。

中学3年生という人生段階は、義務教育修了と進路選択を前にした重要な時期である。この時期における歴

史的出来事との遭遇は、希望の進路を脅かす「進路危機」をもたらす。進路危機の内容や程度は、出来事に遭遇するタイミングや時代状況によって異なり、条件によっては、その後の人生を左右する危機になりかねない。弱冠15歳の彼らは、将来を切り拓くために、そのような進路危機を乗り越えていかなければならないのである。しかし、炭鉱閉山の場合、中学3年生が頼るべき家族や友人、地域なども混乱のなかにあった。彼らは、何（誰）を頼りに、どのような認識のもと進路危機を克服しようとしたのだろうか。

そこで、本論では、1970～80年代に国内で生じた大型炭鉱の閉山を事例に、中学3年生が執筆した作文をもとに、彼らの進路危機と現状認識を明らかにする。そのために、まず、中学3年生の進路選択に関する研究ならびに歴史的出来事と青年たちに関するライフコース研究の知見を整理し、本論の分析課題を提示する（第2節）。つぎに、歴史的・社会的文脈と分析データを概観したうえで（第3節）、閉山タイミングに着目した進路危機の整理を行う（第4節）。そして、時代状況ごとの進路危機と現状認識を指摘し（第5、6節）、本論の知見をまとめる（第7節）。

2. 先行研究の整理と本論の分析課題

(1) 中学3年生の進路選択に関する研究

本論で対象とする1970～80年代は、国内の高学歴化が進展した時代であり、当時の中学3年生にとって「高校進学」は主流の選択肢であった。中学生の進路選択については、主に教育学や教育社会学の領域で研究が蓄積されてきた。都市部の中学生を対象にした研究では、すでに1960年代から大部分の生徒が、家庭の社会的経済的条件にかかわらず高校進学を志望していたことが明らかにされている（松本1969）。そうした趨勢から、学校側も「進学指導」を中心とした進路指導を展開し、高卒後の進路希望に即した学校群・学校・学科への進学指導が行われていた（仙崎1977）。一方、地方（愛知・岐阜）の中学生を対象にした研究では、家庭の所得水準が高校進学の可否を決定する要因であると指摘されており（潮木1975）、地域間で進路選択の規定要因が異なることがわかる。ただし、すでに1970年代半ばに全国の高校進学率は9割を超え、当時の中学3年生にとって、高校進学は当然の選択肢となっていた。

他方、中学生の進路意識（教育期待）形成に着目した荻谷（1986）は、1980年代前半に東京都内の小中学生を対象にしたパネル調査から、高校への進路指導が活発化する中学3年後期から進路意識が明確になっていくことを明らかにしている。1980年代にはすでに、高校入試は「ほとんど全員の生徒を教育選抜に巻き込み」、中学生の段階で、「学業成績が教育的および社会的な成功と強く結びつけて意識」されていたのである（荻谷1986: 105-6）。

(2) 歴史的出来事との遭遇と進路選択

このように高校進学が当然となった1970～80年代にかけて、国内産炭地では炭鉱の事故や閉山が相次ぎ、「炭鉱の中学3年生」たちは、「都会の中学3年生」とは対照的に、進路危機に直面した。これまで、ライフコース研究や教育社会学の領域で閉山と青年たちを事例とした研究が展開されている。1970年代初頭、高度成長期に閉山した常磐炭礦（福島県いわき市）を対象とした研究では、離職者（父親）の早期再就職（職業移行）といわき地域の維持・発展により、青年たちの高校進学とその後の標準的な成人期への移行が達成されたことが指摘されている（正岡ら1996-2006）。また、1980年代前半に閉山した夕張新鉱（北海道夕張市）を対象とした研究では、離職者の再就職困難、地域経済・産業の衰退により、低階層かつ再就職困難層の子どもたちを中心に、明確な進路意識と教育期待（大学進学志向など）を持てなかったことが明らかになっている（笹谷1986）。このように、同じ閉山という出来事であっても、閉山時の時代状況や地域状況により、中学3年生の進路危機が強化・緩和されることが予想される。

一方、上記の研究では、中学3年生の「いつ」閉山を経験したかというタイミング効果が不明である。閉山との遭遇が進路意識を形成する前か後かでは、中学3年生におよぼす影響は大いに異なるだろう。さらに、そうした進路危機に対し、彼らがどのような認識を持ち、進路を検討したのかについても明らかにすべきである。古典的なライフコース研究では、逐次のならびに回顧的データをもとに、青年たちの現状認識にアプローチし

ている (Elder 1974=1986 など)。そこでは、青年たちが社会的場面の問題を自分の欠点ではなく、親の不運や経済的条件によるものと認知することで、その後の適応と社会的成功につながると指摘している。歴史的出来事に遭遇した青年たちは、家族に適切な選択をとることで、環境の変化に適応し、ライフコースの軌道を修正していったのである (Elder 1974=1986)。

(3) 本論の分析課題

以上、先行研究の整理から、本論では3つの分析課題を設定し、論を展開する。第一の課題は、閉山経験のタイミングに関する課題である。すなわち、中学3年生のいつ(何月)に閉山を経験するかによって、中学3年生の進路意識におよぼすダメージが異なるという問いである。進路意識形成期(中学3年2学期以降)に閉山を経験した場合、進路を検討する猶予がなく、深刻な進路危機に直面しただろう。

第二の分析課題は、時代状況に関する課題である。ここでは、高校進学標準化および石炭産業の斜陽化段階に着目し、1970年代前半と1980年代後半の閉山事例を対象とする。時代状況により中学3年生の進路危機が強化あるいは緩和されたのだろうか。炭鉱離職者(父親)の再就職が社会的に用意されていた1970年代前半では、中学3年生(子ども)の進路危機が緩和され、対照的に1980年代後半では、進路危機が強化されたことが想定される。

そして、第三の分析課題は、進路危機に対する中学3年生の現状認識に関する課題である。彼らは、予期せぬ進路危機に直面し、どのような葛藤を抱き、克服しようとしたのだろうか。青年期の多感な彼らは、おそらく、同じく困難な状況にある家族を参照して、進路危機を克服しようとしたと考えられる。

3. 分析対象と方法：石炭産業の収束と中学3年生への接近

本論では、1970～80年代にかけて生じた3つの閉山を事例に、中学3年生の進路危機についてみていく。その際、有用な資料として、各閉山に関する中学生の作文を分析する。分析の前に、本節では、中学3年生の進路危機を規定する歴史的・社会的文脈(国内石炭産業の収束過程、各炭鉱の概要)をおさえ、分析資料の特徴を確認する。

(1) 石炭産業の収束と各炭鉱の閉山

① 1970年代前半の炭鉱閉山：漸次的撤退期

国内石炭産業は、1950年代半ばから衰退が始まり、約半世紀をかけて収束した。1960年代に入り、スクラップ・アンド・ビルドが進められたが、政府は1968年度から石炭産業の撤退を開始した(「漸次的撤退期」、以下、時期区分は矢田(1995))。この期間は、大型炭鉱の閉山が相次ぎ、特に、北海道内陸部に位置した炭鉱の閉山は、地域の崩壊を意味した。本論では、この典型例である尺別炭鉱を第一の分析対象とする。

尺別炭鉱(雄別炭鉱鉄道株式会社)は、道東の山間に位置し、約5,000人が居住する炭鉱街を形成した。炭鉱地区内には小中学校が1校ずつあり、子どもたちは、中学卒業まで同じ環境のもと、共同生活を送った。卒業後は、近隣の都市(釧路市、帯広市など)への進学・就職が主流であった。1960年代以降、炭鉱の衰退が進行し、彼らにとって炭鉱就職はすでに一般的な選択肢ではなかった。そして、1970年1月21日に閉山提案、2月27日に閉山した。従業員の再就職はスムーズに進み、半年後までにおよそ8割が再就職した。主に大都市圏の成長産業に吸収され(「産業転換」、一部が道内の他炭鉱に再就職した(「炭鉱復帰」)⁽¹⁾)。離職者の再就職にともない、家族と子どもたちも転出し、閉山からわずか5ヵ月後に小中学校が閉校、年内までに全住民が転出した。

一方、同時期に、国内有数の炭鉱都市である夕張においても大型炭鉱が閉山した。夕張市は最盛期に20以上の炭鉱が存在し、主に北海道炭礦汽船(北炭)地区(市内北部と南部)と三菱炭業地区(北東部と南部)に

(1) 主な再就職先は、「道外」353人(50.9%)、「道内他産業」223人(32.2%)に再就職した。一方、「道内炭鉱」(炭鉱復帰)は117人(16.9%)と2割以下であった(尺別炭鉱労働組合1970)。

分かれた。そのうち、三菱大夕張炭鉱の閉山は、夕張最初の大型炭鉱の閉山であり、炭都夕張を揺るがす出来事であった。本論では、大夕張炭鉱を第二の分析対象とする。

大夕張炭鉱は、夕張北東部の山間に位置し、約2万人を擁する炭鉱街を形成した。地域内に小学校2校、中学校1校、高校1校を有し、多くの子どもたちが高校まで共同生活を送った。1960年代後半からビルド鉱の開発（三菱南大夕張炭鉱、夕張市南部）にともない合理化が進み、1973年4月19日に閉山提案、6月29日に閉山した。従業員たちは、尺別と同じく、早期に再就職し、道外への移動と産業転換を果たした。一方、市内ビルド鉱への炭鉱復帰も目立った⁽²⁾。閉山により多くの人口が流出したが、町自体は残り、山元の中学校も生徒数を大幅に減少させながら、学級再編を経て存続した（1996年閉校）。

② 1980年代後半の炭鉱閉山：最終的撤退期

その後、オイルショックを受けて、国内石炭産業は現状維持（「石炭見直し期」）で推移したが、ビルド鉱で甚大な事故が相次ぎ、産業は衰退した。前述の夕張においても、北炭夕張新鉱が事故を起こし（1981年）、翌年閉山した。新鉱をはじめ、北炭系炭鉱の離職者の多くが、市内最後の北炭系炭鉱であった真谷地炭鉱に移った⁽³⁾。本論では、衰退産業を周流する労働者たちを吸収した真谷地炭鉱（夕張市南部）を第三の分析対象とする。

真谷地の中学3年生には、小学生のときに市内他炭鉱から転校してきた生徒が多く含まれる。真谷地炭鉱は、最終的撤退政策（第八次石炭政策、「最終的撤退期」）を受けて、1987年9月9日に閉山提案、10月9日に閉山した。夕張から北炭の灯が消え、残すは三菱の炭鉱一つとなった（三菱南大夕張炭鉱、1990年閉山）。解雇された従業員の再就職は、産業転換も炭鉱復帰も難しく、尺別や大夕張とは対照的であった⁽⁴⁾。中学生たちが主に想定していた進路は、市内高校への進学であったが、閉山によって再検討しなければならなかった。

以上のように、1970年代前半と1980年代後半の閉山では、離職者（父親）の再就職状況が大きく異なり、中学3年生が抱えた進路危機も異なると予想される。1970年代前半（尺別、大夕張）の閉山では、父親の再就職先が一般企業（産業転換）だった場合、中学3年生は、進路変更のほか、炭鉱における「一山一家」の共同生活（嶋崎 2017）と対照的な都市生活への適応という課題が課された。また、炭鉱復帰の場合、再度の閉山が想定される環境で生活していく必要があった。一方、1980年代後半（真谷地）の閉山では、父親の再就職が見通せない状況で進路を検討しなければならなかった。

(2) データと分析手法

このような閉山を経験した彼らの進路危機と現状認識に接近できる資料として、閉山に関する作文が挙げられる。国内の産炭地では、閉山や事故が起きたときに小中学生が執筆した作文が豊富に保存されており、回顧的制約なしに彼らの葛藤や動機づけ等を把握できる（笠原 2017）。近年、社会学の領域でこれら作文の分析が着手され、閉山や事故による社会意識、進路意識の変化、不安の学年別傾向などが指摘されているが（新藤 2016; Kasahara 2017）、作文集の部分的な分析にとどまっており、さらなる分析が求められる。

そこで、本論では、上記に挙げた3つの閉山に関する作文集のうち、中学3年生全員分の作文を分析対象とし、作文内容の全体的傾向を示したうえで（第4節）、進路に言及した作文の質的分析を行う（第5、6節）。各閉山と作文集の概要は、表1のとおりである。

作文集は、いずれも原資料（原稿用紙）で保存されていたため、PDF化のうえテキスト入力した。そして、作文集に掲載されていた学級名簿および作文の一人称から「性別」（男・女）を判別し、作文内容から解読可能な範囲で「父職」（炭鉱労働者・非炭鉱労働者）、「父再就職状況」（産業転換・炭鉱復帰、見込み含む）、「本人転校経験」（有・無）を特定した。次節では、作文集の全体像を示すため、非炭鉱労働者子弟の作文も含め

(2) 閉山1年後の時点で約8割が再就職を果たした。主な転出先は「道外」923人、「道内炭鉱」524人、なかでも三菱南大夕張炭鉱には366人が再就職した（夕張市立鹿島小学校 1978）。

(3) 1982年の新鉱閉山では、242名が真谷地炭鉱に移った（新鉱解散記念誌編集委員会 1984: 138）。

(4) 閉山から9ヵ月の段階で、転出者は146名にとどまり、未就職者は402名にのぼった（日本炭鉱労働組合真谷地支部 1988: 204）。

表1 各閉山と作文集の概要⁽⁵⁾

| | 尺別（北海道旧音別町） | 大夕張（北海道夕張市） | 真谷地（北海道夕張市） |
|-------------|-------------|-------------|----------------|
| 閉山年月 | 1970年2月 | 1973年6月 | 1987年10月 |
| 石炭政策区分 | 漸次的撤退期 | | 最終的撤退期 |
| 離職者再就職時期／産業 | 早／他産業・炭鉱 | 早／他産業・炭鉱 | 遅／他産業 |
| 離職者主な地域移動 | 他出（道内外） | 他出、残留（市内） | 他出（道内） |
| 高校進学率（閉山前年） | 57.1% | 74.4% | 92.3% |
| 作文執筆時期 | 閉山2週間後 | 閉山1～2ヵ月後 | 閉山数日後 |
| 作文執筆者数 | 103名 | 239名 | 96名 |
| 作文集編纂目的 | 「閉山時の学校記録」 | 「思い出の文集」 | 「真谷地の生活忘れないため」 |

出典：（石炭政策区分）矢田 1995、（離職者再就職時期／産業、地域移動）尺別炭鉱労働組合 1970、夕張市立鹿島小学校 1978、日本炭鉱労働組合真谷地支部 1988、（高校進学率）北海道 1956-1990。

ているが、第5・6節の質的分析では、炭鉱労働者子弟の「進路」に関する作文に限定している。

分析の前に、作文資料の制約について確認する。作文資料は、結論が肯定的な意思表示になりがちであるという制約を抱えており、分析上、限界のあるデータである（笠原 2017）。いずれも学校・教員が主体となって編纂した文集であり、執筆者である生徒たちは、読者である教員や父母の目を意識して執筆したと想定される。そのため、将来に対する前向きな意思を結論に示す傾向にある。しかし、本論の主な関心は、作文全体に表れる進路危機ならびに「前向きな」結論に至る彼らの論理・文脈である。また、いずれの文集も閉山時のようすや考えの「記録」を目的に編纂されているため（表1）、優秀作品の選出を目的とした作文とは異なり、生徒の率直な考えが表れているといえる。

4. 閉山タイミングと進路危機：中学3年のいつ閉山を経験するか

中学3年のいつ（何月に）閉山を経験するかで、進路危機の内容は大きく異なる。進路意識形成期である中学3年2学期以降に閉山を経験した生徒は、進路を再検討する猶予がなく、深刻な進路危機に直面したことが予想される。作文内容をもとに全作文を分類すると（表2）、閉山が進路選択に近づくにつれて、「自身の将来」、とりわけ「進路」に言及する割合が増加していることがわかる。また、友人や地域、家族など複数の項目にまたがって書かれる作文が多くみられる。以下では、6月の閉山から順に、10月、2月の閉山に関する作文の傾向を指摘し、閉山タイミングと彼らの進路危機についてみていく。

表2 作文内容の種類（%）⁽⁶⁾

| 閉山タイミング | N | 友人との別れ | 地域衰退・崩壊 | 家族の生活・将来 | 自身の将来 | 〔自身の将来〕内訳 | | | | その他のみ |
|----------|-----|--------|---------|----------|-------|-----------|---------|------|------|-------|
| | | | | | | n | 将来の生活全般 | 進路 | 地域移動 | |
| 6月（大夕張） | 239 | 64.0 | 21.3 | 2.1 | 41.8 | 100 | 77.0 | 7.0 | 32.0 | 9.6 |
| 10月（真谷地） | 96 | 32.3 | 62.5 | 38.5 | 58.3 | 56 | 71.4 | 46.4 | 39.3 | 5.2 |
| 2月（尺別） | 103 | 31.1 | 33.0 | 51.5 | 73.8 | 76 | 47.4 | 63.2 | 39.5 | 4.9 |

(5) 尺別「高校進学率」は、町村別進学率が不明のため、北海道統計書の「釧路管内（郡部）」進学率を参照している。なお、作文集の利用にあたっては、保存主体であり提供者である元尺別炭鉱中学校教頭（尺別炭鉱閉山に関する作文集）ならびに夕張市教育委員会（大夕張炭鉱、真谷地炭鉱閉山に関する作文集）から研究目的での利用の許可を得ている。

(6) 複数項目にまたがる内容はそれぞれの項目にカウントしている。なお、大夕張に関する作文集は、他の作文集に比べて、一人当たり字数が少ないため、言及される内容も少なくなっている。

(1) 6月の閉山と進路危機：進路意識形成前

4月19日に閉山提案、6月29日に閉山を経験した中学3年生（大夕張）は、進路意識形成前、中学3年前期の閉山であったため、進路に関する不安よりも「友人との別れ」に関する不安を抱えた（表2、64%）。「ぼく達、閉山で別れ別れになり、もうあえなくなりました」（大夕張、男子1）と友人との離別に対する不安を抱えたり、部活動に入っている生徒は、「閉山のせいでクラブの人数がたりなくなるので中体連ができなくなってしまう」（大夕張、男子2）など、将来よりも現在に関する不安を抱えていた。

一方、「自身の将来」に関する不安を示す生徒は4割程度いたが、その内容は、具体的な「進路」より「将来の生活全般」がほとんどだった（表2、「自身の将来」言及のうち77%）。なかには、「この閉山で僕の人生はきっと変わり、悲しい思い出となって残るだろう」（大夕張、男子3）と、閉山が人生全体を左右すると認識していた。中卒後の具体的な進路については、閉山で「他の土地へ行ったら」「もしかしたら高校も入れないかも」（大夕張、女子1）しれないと進学に関する不安や、就職に関する不安を示す生徒がいた。

このように、6月の閉山は、中学3年生にとって進路意識を形成する前の段階であり、進路変更が可能な時期の閉山であったため、ほとんどの生徒は、卒業後の具体的な進路危機に直面しなかった。しかし、早期に進路意識を形成していた生徒は、希望の進路を実現できないかもしれないという危機に直面した。

(2) 10月の閉山と進路危機：進路意識形成段階

一方、9月9日に閉山提案、10月9日に閉山を経験した中学3年生（真谷地）は、進路意識形成期、中学3年後期の閉山であったため、進路に関する不安を抱えた。「自身の将来」に言及した生徒（58%）のうち、約半数が「進路」に関する不安を示している。最も多く言及されていた「地域衰退・崩壊」（63%）も、「進路」と結びつけて書かれていた。「（夕張の）人口が減少していけば、当然の様に高校の間口も減っていきます」（真谷地、女子1）と、それまで当然とされていた市内高校への進学が危ぶまれた。また、「地域衰退・崩壊」は、父親の市外での再就職と自身の転校を導くと予測し、市外の夕張市内の高校よりも「レベルが高い」高校に進学できるかという危機に直面した。ある生徒は、主な転出先として予想される札幌では、「レベルが高いので頑張りが必要です」（真谷地、男子1）と述べている。

以上のように、10月の閉山は、中学3年生にとって進路意識を形成している段階での閉山であり、進路変更も容易ではなかったため、多くの生徒が進路危機に直面した。特に、第6節でみるように、この閉山が、高校進学が当然とされていた時代に生じ、なおかつ夕張地域の衰退を決定づけたため、彼らは高校進学に関する多大な不安を抱えた。

(3) 2月の閉山と進路危機：進路選択直前

さらに、1月21日に閉山提案、2月27日に閉山を経験した中学3年生（尺別）は、進路選択直前、卒業間近の閉山であったため、中卒時の進路選択はもちろん、その後の進路に関する不安を抱えた。進学志望の生徒は高校入試を目前に控え、就職志望の生徒はすでに就職先が決まっておき、彼らの大半が「自身の将来」に関する不安を示した（74%）。その主な内容は「進路」（「自身の将来」言及のうち63%）であり、主に進学・就職後の不安であった。進学志望の生徒は、「高校へいき、仕事につくことがへいぼんなことだと思っていたが、これもまたあやしくなってきた」（女子、431205）と述べている。

このような進路に関する不安は、再就職先を探す父親など「家族の生活・将来」（52%）や急激な「地域衰退・崩壊」（31%）の不安とともに記述された。彼らの主な進学先は、釧路あるいは帯広であったが、「父の仕事が決まった時そこへ引越さなければならず」、「学校の転校」や「高校に行けなくなった場合」（尺別、女子1）、就職に変更せざるをえなかった。一方、就職志望の生徒も、父親の再就職先に同行する場合、自身の就職先を変更しなければならなかった。このように、2月の閉山は、中学3年生にとって卒業直前の閉山であり、進路変更が不可能な段階であったため、中卒後以降の中長期的な進路に関する危機をもたらした。

以上のように、閉山を中学3年のいつ（何月に）経験するかというタイミングによって、進路危機の内容が異なる。とりわけ、進路意識形成期（中学3年2学期以降）の閉山は、生徒に深刻な進路危機をもたらした。

このような進路危機は、時代状況によってどのように強化あるいは緩和されたのだろうか。そして、彼らは、進路危機をどのように受け止め、進路を再検討したのだろうか。次節では、1970年代前半に閉山を経験した中学3年生の作文をもとに、彼らの現状認識を明らかにする。

5. 1970年代前半の閉山と中学3年生の現状認識

本節では、尺別炭鉱の閉山（1970年）と大夕張炭鉱の閉山（1973年）に関する作文を質的に分析し、進路危機に直面した中学3年生の現状認識を明らかにする。両炭鉱の閉山は、地域の急激な衰退をもたらした点、離職者（父親）の産業転換と早期再就職が可能であった点で共通しているが、後者（大夕張）では市内ビルド鉱への再就職（炭鉱復帰）という選択肢が残されていた。このように、社会的受け皿が用意されていた時代状況は、中学3年生の進路危機に対してどのような効果を持っていたのだろうか。

(1) 1970年、尺別炭鉱の閉山と中学3年生

前節で確認したように、尺別の中学3年生は、進路選択直前の閉山によって、進学もしくは就職の危機に直面した。彼らの進路危機を規定したのは、父親の再就職状況（産業転換・炭鉱復帰）であった。

①進学先の変更

進学志望の生徒は、すでに高校入試を終え、近隣（釧路や白糠、帯広）の高校に進学する予定だった。しかし、父親の再就職先次第では、たとえ試験に合格していたとしても、志望校への進学を諦めなければならなかった。特に、父親が大都市圏の一般企業に再就職する場合（産業転換）、都会の高校への編入と都市生活への適応が課された。つぎの生徒（尺別、女子2）は、家族の転出先についていく決心をするが、一方で進学に関する不安を示している。

家族について行こう！…とも思う。その上で直面するのが高校のこと。閉山と私の高校進学とが重なるなんて考えたこともなかったせいかな頃になって気持ちが、あせり始めてきた。

この生徒は、閉山が自身の進路選択と重なったタイミングの悪さと家族の地域移動から、進学危機に直面している。しかし、「私一人だけここに残るわけにもいかない。どこへ行こうと私は私」と明言したうえで、以下のように危機に対処しようとしている。

私自身、道内には、とどまりたくない。(中略) 住めば都——という言葉がある。だから、たとえ尺別とは全く違った環境の所へ行っても私は、その環境をすばらしいと思うようになるかもしれない。(中略) 感傷にばかりひたってもいられない。やはり私はこれからも現実をしっかりとみて、炭鉱閉山という事を土台とし新たな心で勉強、生活に意欲を燃やしたい。

この生徒は、故郷との決別という手段を用いて、不安を払拭しようとしている。他出する場合、道内ではなく道外を志向し、「全く違った環境」でも適応しようと、自身を鼓舞しているように見える。このように、父親の産業転換は、進学志望の生徒に高校進学に関する不安をもたらしたと同時に、新天地への期待や新たな生活を志向させる効果を有していた。

一方、父親の再就職が見通せない場合、生徒の進学危機は、いっそう深刻になった。つぎの生徒（尺別、女子3）は、釧路の高校を「いちおう」受験したが、家族の移動先も決まらず、「これからどうして良いのかわからない」状態だった。「閉山がもう少し早ければ」、または「おそければ」、「自分の進路について、こんなに迷わないで決められたと思う」とタイミングの悪さを指摘し、つぎのように述べている。

両親が行くという所ならどこでもふっついで行く。(ママ) ただ、やはり学校のことが心配になる。(中略) そ

のことを考えるとここから離れたくない気がする。しかし、私の父くらいの年齢になるとそう簡単に職業が見つかるものではないので、わがままは言えないと思う。

この作文には、先行きが見通せない状況から生じる不安と、それを克服しようとする決心が見え隠れしている。弱冠 15 歳の彼らにとって、親と離れ、志望通りの進路を選択することは困難であった。特に女子生徒は、親の理解を得るのが難しかった。この生徒のように父親が高齢だった場合、父親の再就職が難航すると予測し、尺別に残ると言う「わがまま」は言えなかった。彼らは、家族の状況に即し、適切的な進路を選択しようとしていたのである。

②進学の断念

他方、進学志望の生徒のなかには、卒業まで猶予がなかったために、進学自体を断念・保留した生徒もいた。つぎの生徒（尺別、女子 4）は、釧路の高校に進学する予定だったが、父母と親戚の釧路以外への移動が決まり、志望校への進学を断念せざるをえなかった。そして、「1年間も^(ママ)家手だいおしなくてはならなく」なり、以下のように述べる。

みんなは、だんだん進んでいくということでも、ふあんや、自分ではどうにもならないということがぐやしくお思い、今は運を天にまかせると言うことしかないと思います。

周囲では進学や就職、地域移動などが決まっていくなか、この生徒のように進学を断念しなければならなかった生徒は、大きな葛藤を抱えた。中学生という無力な段階では、将来を「天にまかせ」しかなかったのである。

また、早期に進学を断念し、就職へと切り替える生徒もいた。つぎの生徒（尺別、男子 1）は、40 代後半である父親の炭鉱復帰を予測し、「石炭企業はさびれて行くだけのように思える」ため、家族の将来を憂いて就職を決断した。

閉山という事情が加わったために、自分の一番の希望であった工業高校進学もだめになるはめになったのである…とカッコイク言いたい^(ママ)が内心あまり早まりすぎたと後悔とまではきかない^(ママ)が、それらしき事を感じているのも事実である。

進路選択を前にした中学 3 年生にとって、父親の炭鉱復帰は、彼らの進路や家族の将来に対する不安を増大させた。この生徒は、炭鉱に移動する家族の将来を懸念して、進学を諦め、就職と自立を選んだ。彼は、進路変更に対して「後悔」の念を抱いている。しかし、最終的に、自身を気づかう父親に「ありがたみを痛感し」、就職してから「親に心配だけはかけたくない」と述べ、進路変更に対する肯定的意味づけをおこなっていた。

このように、進学志望の生徒たちは、父親の年齢等から再就職条件（産業や地域）を予測し、困難が予想される場合は家族の選好を優先して、進学先の変更や進学の断念を受け入れようとしていた。

③就職先の変更

他方、就職志望の生徒も、父親の再就職と地域移動によって、就職先を変えなければならない危機に直面した。つぎの生徒（尺別、男子 2）は、父親が炭鉱に再就職した場合、親が自分を炭鉱に「つれていく」ため、就職先を変更せざるをえないとしている。そして、父親の炭鉱復帰と炭鉱での生活について、以下のように否定的な見方を示している。

もし（父母に）ついていっても炭鉱だったらまたこんなことにもなりえない。またこんなことになったら弟や母がかわいそうだ。だからもう炭鉱にはいきたくない。（中略）家にかえったらいつものように父

と母がけんかをしておもしろくない。(中略) 学校にきてもいつも閉山の話になる。「おまえどこいくんだ」ときかれたら「まだきまっていない」という人もいる。ぼくは炭鉱閉山のない国へいきたい。(括弧内、引用者注)

この生徒は、今回の閉山経験から炭鉱の先行きの悪さを実感し、父親の炭鉱復帰に不満を示している。自身の経験だけでなく、「弟や母」、友人が混迷している状況に触れ、「炭鉱閉山のない国へいきたい」と逃避のような表現で結んでいる。彼のように、父親の移動先が炭鉱であった場合、突然の進路変更と地域移動に対して、否定的な認識を示す傾向にあった。

対照的に、「炭こう夫から足を洗う」とするつぎの生徒(尺別、男子3)は、「いつまでも親のもとにいては、男がなくというじゃないか!」と宣言して、親元を離れ、志望通りの進路(就職)を選択しようとしていた。この生徒は、作文の結論部分で「日本をせよう俺達^(ママ)が、こんなところではいけない」と大局的な見方で自身を鼓舞している。父親の産業転換は、就職志望の生徒にとって、自身の希望の進路を実現させる再就職先として捉えられていた。

以上のように、1970年2月に閉山を経験した尺別の中学3年生は、父親の再就職タイミング、産業、地域を考慮(あるいは予測)して、自身の進路を検討した。その際、父親の再就職先が炭鉱だった場合(炭鉱復帰)、進学にせよ、就職にせよ、深刻な不安を抱え、進路危機に直面した。彼らは、予期せぬ進路変更後に後悔や葛藤を抱えながらも、同じく困難な状況にある家族に適切な選択として、進路変更を納得しようとしていた。

(2) 1973年、大夕張炭鉱の閉山と中学3年生

①進路危機への対処

では、炭鉱復帰が一つの主要な選択肢であった炭都夕張において、中学3年生は、どのような進路危機に直面し、対処しようとしたのだろうか。前節でみたように、彼らの大半は、切迫した進路危機に直面していなかったが、一部の生徒は、父親の再就職と中卒後の進路に関して不安を示していた。進学志望のつぎの生徒(大夕張、女子2)は、父親の産業転換にともなう地域移動を予想し、転出と新たな生活、そして、高校進学に対する不安を抱いていた。

私は、ここで生まれ、育ち、今まで生きて来た。この土地を離れられるだろうか。とても、わびしく、さびしい気もちだ。今、私達は、中学3年生というだいたいな時期なのに、おちつかない。なぜかおちつかない。他の土地の学校へ行ったら、どうしよう。もしかして高校も入れないかもなんて、不安が頭にうかぶ。

この生徒は、父親の産業転換と地域移動によって、市内の高校への進学が脅かされた。しかし、この生徒は、そうした不安を「のりこえていきたい。第二の人生だと思ってがんばっていきたい」と述べ、奮起しようとしている。このほか、同じく進学に関する不安を示した生徒(大夕張、女子3)は、「私達には未来がある。いつまでも、古い思い出にしがみついたらいけない。甘えてはいけない。新しい世界へ、雄雄しく羽ばたこう!」と述べている。彼らは、尺別の中学3年生同様、故郷との決別を図って進学危機を乗り越えようとしていた。

また、就職を志望していた生徒も卒業後の進路を危惧していた。ある生徒(大夕張、女子4)は、卒業後、友人と「一緒に就職しよう」と約束していたが、閉山後の離別を予想し、「今になっては、夢になるのだろうか」と不安を抱いている。彼女は、作文の最後に「いつまでも4人の心が一つにまとまっていれば、必ずできる」と記し、志望の進路(友人とともに就職)を選択しようとしていた。このように、大夕張の中学3年生は、進路選択まで猶予があったにもかかわらず、父親の産業転換や地域移動にともない、進学・就職に関する不安を抱えた。

②炭鉱復帰に対する認識

一方、彼らは、父親の炭鉱復帰について、どのような認識を持っていたのか。彼らは、転校を回避できる残留（炭鉱復帰）を肯定的に捉えていたのだろうか。ある生徒（大夕張、男子4）は、父親の市内ビルド鉱への再就職が決まり、転校していく友人の方が「いろいろな面で、大変」だと考えていた。そして、「ここに残って自分の力を十分に発揮し、勉強や運動に全力をつくし」、「悔いのない中学生生活を終わりたい」と目標を設定している。このように、父親の炭鉱復帰は、子どもらの転校を回避する点で、望ましい選択であった。

他方、過去に転校を経験した生徒たちは、今回の閉山を受けて、父親の炭鉱復帰に否定的であった。前述のように、大夕張の中学3年生は、他炭鉱からの転校生が複数人含まれていた。彼らは、過去の転校と適応の経験から、「また新しい友達ができるといい、これからも頑張りたい」（大夕張、女子4）と期待を示すほど、高い適応能力を有していた。しかし、「閉山の苦しみをあじわうのは2回目」という生徒（大夕張、女子5）は、「炭鉱はもうたくさんです」と述べ、再度の転校について否定的であった。

対照的に、父親の産業転換が決まった生徒（大夕張、男子5）は、「今度行く所は、炭鉱ではないから多分もう転校はしないだろう」、「今度からは新しい友達」と、新たな生活に期待を示している。このように、大夕張の中学3年生は、発展が期待されたビルド鉱への炭鉱復帰に対し、転校経験者を中心に否定的であった。

(3) 小括

1970年代前半に閉山を経験した中学3年生は、炭鉱離職者の再就職先が社会的に用意されていた時代状況によって、父親の再就職時期や産業、条件等を想定し、自身の進路危機と向き合えた。特に、父親の産業転換が決定または見込まれる場合、生徒たちは、進学・就職先の変更はあっても、故郷と決別を図るなどして、希望に近い進路を実現しようとした。この点において、彼らの進路危機は緩和されたといえる。

一方、父親が高齢であり、炭鉱復帰が決定または見込まれる場合、生徒たちは再度の閉山と転出を予測し、自身の進路を再検討しなければならなかった。特に、卒業まで猶予が無かった尺別の中学3年生は、進学を断念し、就職するケースもみられた。また、大夕張の中学3年生も、炭鉱復帰は転校の回避を意味したにもかかわらず、必ずしも望ましい選択肢ではなかった。通常、過去に転校経験のある生徒は、転校に対する適応能力を有しているが（横島 1976）、その転校経験者を中心に、炭鉱復帰に対して否定的だった。この点において、彼らの進路危機は強化されたといえる。

このように中学3年生たちは、父親の再就職状況や家族の生活状況に左右されつつ、将来を参照しながら、自身の進路を検討していた。もちろん、彼らは、志望の進路を選択できない状況に大きな葛藤を抱いた。進学を断念し就職を選択した（せざるをえなかった）生徒は、なおさらであり、作文に肯定的な結論を出せない生徒もいた。しかし、多くの生徒は、より困難な状況にある家族を参照し、適格的にならうと進路変更を決断した。それは、経済的にも精神的にも自立していない彼らが、予期せぬ進路変更を自身に納得させる数少ない手段の一つであった。

6. 1980年代後半の閉山と中学3年生の現状認識

前節でみたように、1970年代前半は、炭鉱離職者（父親）の再就職に関する選択肢がいくつか用意され、なおかつ早期の再就職が可能だったため、中学3年生もある程度の将来像をもって進路危機に向き合えた。しかし、1980年代後半の閉山は、そうした炭鉱離職者の社会的受け皿は用意されず、中学3年生たちは、先行きが見通せないなか進路を模索した。高校進学がさらに当然の選択肢となるなか、彼らは、どのような進路危機に直面し、それらを克服しようとしたのだろうか。

(1) 地域衰退、再就職難の認識と進学危機

真谷地の中学3年生は、1987年10月の閉山を経験して、炭都夕張の衰退を認識していた。「夕張も炭鉱の町から、借金の町（マママ）になると思う」（真谷地、男子2）と述べるように、彼らにとって、夕張から北炭の炭鉱が消えたことの衝撃は大きく、この閉山を炭都夕張の終焉と位置付けていた。さらに、彼らは、夕張だけでな

く他地域の炭鉱事情も把握し、国内石炭産業の衰退を認識していた。ある生徒（真谷地、男子3）は、「国の炭鉱ももうほとんどなく、もう炭鉱へ行ってもだめだ」という認識を持っていた。

このような産業、地域の衰退を認識していた彼らは、父親の再就職が難しく、いずれ夕張から他出しなければならぬと予測していた。彼らは、自分たちの父親がこれまで炭鉱労働者として生きてきたゆえに、再就職が難しいと考えていた。ある生徒（真谷地、女子2）は、「今まで長い間、炭鉱で働いていて他の仕事をしたことのないお父さんだから、これからのことは大変だと思う」と、産業転換の難しさを指摘している。そして、別の生徒（真谷地、男子4）は、「今の夕張の現状を考えればそう簡単に（父親の）仕事が見つかるわけはないし、このまま夕張にいれるとは限りません」と述べるように、夕張を離れなければならぬと予想していた。

市内の高校を志望していた彼らにとって、突然の地域移動は、進学危機を招いた。札幌をはじめ学区外の高校に進学するには、相当の対策が必要であった。しかし、すでに中学3年の10月であり、志望校の変更に十分な時間はなかった。たとえ入学できても、入学後の高校生活についていけるかどうかという不安もあった。彼らは、自分の学力・成績で入学できそうな市外の高校を探した。「転校、一番にいやなことです」と述べる生徒（真谷地、男子1）は、「勉強も進んでいるところ」に閉山をむかえ、「みんなが心配しています。自分の入れる高校の最低点や平均点等を見て進路を決めている所です」と学級全体の不安なようすを描写している。

さらに、彼らは、たとえ父親の再就職先が市内だとしても、市内高校の入学定員数が減少し、入学が難しくなると予測した。高校進学が当然となっていた時代（1986年夕張市高校進学率：92.3%）、中学3年生たちは、「将来の自分の事を考えるとやはり高校に入って勉強した方が良いに決まってい」と考えていた（真谷地、女子3）。父親の再就職先が市外・市内どちらになっても、彼らは、自身の将来を切り拓くために、高校進学を達成しなければならぬと考えていた。

(2) 進学危機の克服と家族の将来

一方、上記の生徒（真谷地、女子3）が「（父親が）今まで苦勞してくらしていたのに、これからは職を失い生活が大変だと思います。私達は一生懸命努力しなくてははいけません」と述べるように、彼らの進学達成に対する努力は、個人的な動機だけでなく、家族を志向した動機でもあった。彼らは、父親の再就職先がどの地域になっても、自身の進学で親に迷惑をかけないようにしようとした。つぎの生徒（真谷地、男子5）は、父母と自分自身をはじめ「みんな」の「苦しい状況」に触れながら、自身のできることを明確にしている。

（父親の）新しい仕事といっても才が才なのでむずかしいと思います。でも早く仕事を見つけないと給料が入らないのでこまります。その分、母が今働いています。僕が今、出来る事といったら、希望高に合格できるだけの学力と、高校に合格してもついて行ける学力を身につける事です。この様に苦しい状況だけど、苦しいのは自分だけではなく、みんなが苦しんでいます。苦しい状況に負けない様に頑張っていきたいと思います。（括弧内、引用者注）

閉山によって失業した父親はもちろん、母親も家計補助のために働き、「苦しい状況」にあった。そうした状況のなか、この生徒ができることは、希望する高校に無事に進学するための学力をつけ、さらに、入学後も高校に「ついて行ける」ための学力をつけることであった。

このほか、高校進学にむけた勉強はもちろん、その後の就職と経済的自立によって、家族を支えようとする生徒もいた。ある生徒（真谷地、男子6）は、再就職で必死な父親と、家計のやりくりで大変な母親に言及したうえで、自分ができることとして、「一生懸命に勉強すること」、「父母達の手助け」、そして、「1日でも早く、職業につけて家計をきちんと立て」ることを挙げている。そうした、長期的な目標を達成するためにも、高校進学が第一の課題であった。

このように彼らは、父親の再就職が見通せないなか、高校に進学できるかどうかという深刻な危機に直面した。彼らにとって当然の進路であった市内高校への進学が危ぶまれ、多大な不安を抱えるが、困難な状況にある父母に貢献するために、どこの高校でも進学できるようにしておく必要があった。彼らは、志望校の変更と

高校進学が家族に適合的な選択であると認識し、進路危機を克服しようとしたのである。

ただし、中学3年の10月に志望校を変更することは容易ではなく、すべての生徒が家族の選好を優先できたわけではなかった。なかには、父母の不遇を考慮しながらも、志望通りの進路を選択しようとする生徒もいた。つぎの生徒(真谷地、女子3)は、市内の炭鉱を転々としてきた父親の不遇に言及しつつ、「迷惑をかける」とわかっているが、志望通り、市内の高校に進学すると述べている。

そのころ(1980年、清水沢炭鉱閉山)はまだ働く所もありましたが、今はあまり職がないので困ります。父はあまりそんな事考えるなど言いますが、やはり私としては高校の事で夕張から出られないみたいで気がかりだけど、今から後悔しても仕方のない事です。父には迷惑がかかると思うけど、私は夕張の高校に行くつもりです。今まで高校受験の事でこんなに親に迷惑をかけるとは考えてもみませんでした。迷惑かけた分沢山勉強して高校で良い成績も取り良い職につき親孝行できたらと思っています。(括弧内、引用者注)

この作文から、真谷地の中学3年生にとって、志望通りの進路選択(市内高校に進学)がいかに難しく、葛藤をともなうものであったかがわかる。市内の高校への進学は、父親の再就職を市内や近隣に限定させる。この生徒は、その点において、「親に迷惑をかける」と認識している。しかし、自身の人生を左右する進路選択を中学3年の秋に変更することは容易ではなかった。したがって、彼女は、親に「迷惑をかけた分」、将来的に「親孝行」したいと述べている。このように、真谷地の中学3年生は、家族に適合的な進路に変更するか(市外高校を含む進学先の変更)、あるいは、家族にとって適合的ではない志望通りの進路(市内高校への進学)を貫くかという間で葛藤していた。

(3) 小括

1980年代後半の閉山を経験した中学3年生は、1970年代前半の閉山とは対照的に、父親の再就職先・時期が見通せないなか、高校に進学できるかどうかという進学危機に直面した。この時代、中卒後の進路として高校進学が当然とされ、進学から就職という進路変更も一般的ではなかった。真谷地の中学3年生が直面した進路危機は、進路変更が難しいタイミング(中学3年の10月)効果に加え、こうした時代状況によって強化された。

彼らは、深刻な危機に直面しながらも、自身の将来を切り拓くため、そして、困難な状況にある父母に貢献するため、高校進学を目指した。無論、彼らにとって進路変更(ここでは志望校の変更)は容易ではなく、葛藤を抱えたが、自身の高校進学が父親の再就職や家族の新たな生活への適応に不可欠であると認識し、進路変更を検討した。彼らは、石炭産業の衰退に最後まで翻弄されてきた家族の不遇に言及し、家族の新たな生活に適合的な進路変更を行おうとしたのである。その分、志望通りの進路(市内高校への進学)を選択しようとした生徒は、大きな葛藤を抱えることになった。

7. 結論

本論では、1970~80年代の炭鉱閉山に関する中学3年生の作文を分析し、歴史的出来事に遭遇した青年たちの進路危機ならびに現状認識を、タイミングと時代状況に着目して整理した。まず、第一の分析課題である閉山タイミング(中学3年のいつ(何月に)閉山を経験するか)と進路危機について、進路意識の形成時期ごとに整理した。進路意識を形成する前(中学3年前半)の閉山は、中学3年生に大きな進路危機をもたらさなかったが、形成している段階(中学3年後半)の閉山は、進路変更等の深刻な危機をもたらした。とりわけ、進路選択・卒業直前の閉山は、進路を再検討する猶予がなく、不本意な進路変更をもたらした。

つぎに、第二の分析課題である進路危機におよぼす時代状況の効果について、作文の質的分析から検討した。1970年代前半(石炭産業の漸次的撤退期)の閉山では、炭鉱離職者(父親)の再就職先が社会的に用意され、なおかつ中卒者の雇用機会が存在したため、中学3年生の進路危機を緩和した。ただし、父親の炭鉱復帰は、

彼らに再度の閉山や転出を想起させ、進路危機を強化した。一方、1980年代後半（石炭産業の最終的撤退期）の閉山では、炭鉱離職者に対する社会的受け皿が用意されておらず、なおかつ高校進学が当然とされていたため、進路危機を強化した。特に、進路変更が難しい段階（中学3年後半）で閉山に遭遇した生徒は、最も深刻な進路危機に直面した。

そして、第三の分析課題である進路危機の現状認識と克服について、同じく作文の質的分析から明らかにした。多感な彼らは、周囲の状況をつぶさに観察し、特に、父親の再就職状況など、家族について言及していた。彼らは、自身の選好（志望の進路選択）と家族の選好（新たな生活への適応）との間で葛藤するが、より困難な状況にある家族に適合的となることで、進路危機を克服しようとした。

このように本論は、閉山を経験した中学3年生の進路危機だけでなく、危機を乗り越えようとする彼らの論理や意味づけも明らかにした。ここでは彼らの作文のみを対象としているため、今後、追跡調査や元教員へのインタビューなど補完的調査の実施が課題である。

彼らはその後、どのような人生を送ったのだろうか。作文に書かれた意気込みや目標は、達成されたのだろうか。筆者は、共同研究のなかで「尺別の中学3年生」に追跡調査を実施している。詳細は別稿にゆずるが、彼らは新たな環境で苦闘しながらも、転機を見出し、人生を切り拓いてきた。そのとき、彼らの資源となったのは、閉山と遭遇した際に培った対処能力と、ともに困難を乗り越えた家族であった。青年期における歴史的出来事との遭遇とその中長期的影響を解明するためにも、今後さらなる追跡調査が求められる。

付記

執筆に際して、元尺別炭鉱中学校教頭ならびに夕張市教育委員会「ゆうばり歴史・教育資料室」所蔵の作文集を利用した。また、本論は、夕張地域史研究資料調査室「第55回鹿之谷ゼミナール」（2018年2月17日開催、道民カレッジ連携講座、於：ゆうばり共生型ファーム）での報告にもとづくものである。記して謝意を表したい。

参考文献

- Elder, G. H., Jr., 1974, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, The University of Chicago. (=1986, 本田時雄・川浦康至・池田政子・伊藤祐子・田代俊子訳, 『大恐慌の子どもたち 社会変動と人間発達』 明石書店.)
- 北海道, 1956-90, 『北海道統計書』.
- 解散記念誌編集委員会編, 1984, 『解散記念誌 新鉱』 夕張新炭鉱労働組合.
- 荻谷剛彦, 1986, 「閉ざされた将来像——教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究』 41: 95-109.
- 笠原良太, 2017, 「石炭産業研究における作文資料の可能性と課題—炭鉱での生活, 事故, 閉山に関する小中学生の作文を事例に」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌 = WASEDA RILAS JOURNAL』 5: 109-121.
- Kasahara, R., 2017, “Children’s Experiences of the Coal Mine Disaster: Analysis of Junior High School Students’ Essays in Yubari City”, *Mineral Exploitation and Sustainability*, 2: 253-8.
- 正岡寛司ほか編, 1998-2007, 『炭鉱労働者の閉山離職とキャリアの再形成』 I-X, 早稲田大学文学部社会学研究室.
- 松本良夫, 1969, 「低い進路志望と反抗的の就学態度——社会移動過程の一位相としてみた中学校生活」『教育社会学研究』 24: 45-61.
- 日本炭鉱労働組合真谷地支部, 1988, 『真谷地——美わしき山河と人情のヤマ』.
- 笹谷春美, 1986, 「地域社会変動と教育・発達問題——夕張市における基幹産業の衰退が子ども達に与える諸影響を中心として（実証的研究その1）」『北海道教育大学紀要』 37: 17-32.
- 仙崎武, 1977, 「進路指導の実態と課題——中学校・高等学校における指導体制と実践を中心にして」『教育社会学研究』 32: 31-50.
- 嶋崎尚子, 2017, 「炭鉱閉山と労働者・家族のライフコース——産業時間による説明の試み」 岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治 編『変容する社会と社会学—家族・ライフコース・地域社会』 学文社: 152-76.
- 新藤慶, 2016, 「炭鉱閉山がもたらす子どもの生活と意識の変容—尺別炭鉱閉山前後の中学生の作文・手紙を通じて—」『JAFCONF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』 vol.9.
- 尺別炭鉱労働組合, 1970, 『道標』.
- 潮木守一, 1975, 「進路決定過程のパス解析——高校進学過程の要因分析」『教育社会学研究』 30: 75-85.
- 矢田俊文, 1995, 「石炭産業」産業学会編『戦後日本産業史』994-1013. (再録: 2014, 『石炭産業論』 原書房).
- 横島章, 1976, 「転校生の適応過程に関する研究 (I)」『日本教育心理学会総会発表論文集』 18: 450-1.
- 夕張市立鹿島小学校, 1978, 『鹿島のあゆみ』.